

なかとみいせき 中臣遺跡 (第95次)

調査期間：令和5年5月10日(水)～5月24日(水)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「中臣遺跡」にあたります(図1)。過去に東隣で行われた調査(図2、調査1)で、建物跡をはじめとした複数の遺構を確認しており、今回の調査地でもこれらの遺構が展開する可能性が高かったことから、発掘調査を実施しました。

発掘調査は令和5年5月10日～24日まで、作業日数は延べ10日、面積73㎡を対象に実施しました。

2 中臣遺跡について

中臣遺跡は、旧安祥寺川と山科川に挟まれた栗栖野丘陵上に位置する、山科盆地を代表する集落遺跡です。1969年に、地元の高校生が「中臣」町で弥生土器片を採集したことをきっかけに発見されました。1971年に第1次調査が行われて以降、多数の調査が行われており、今回の調査は第95次調査となります。これまでの調査によって、中臣遺跡では旧石器時代から平安時代の人々が活動した痕跡が確認されています。特に、弥生時代後期から古墳時代初頭、古墳時代後期から奈良時代頃の住居や古墳が数多く見つかり、この時期に人々が多数居住していたことが知られています。

調査地の東を南北方向に走る西野道では、1998年の拡幅工事時に発掘調査が行われています(図2、調査1)。この調査では、今回の調査地の東隣付近で奈良時代の掘立柱建物が検出されています。また、北東の市営団地建設時の調査では、古墳時代後期から奈良時代の掘立柱建物・竪穴住居や古墳が多数検出されています(図2、調査2)。今回の調査地が位置する丘陵上で、人々が活発に活動していた様子がうかがえます。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査は、既存建物の解体時に遺構面の大半が削平を受けていたこともあり、狭小な範囲での調査に留まりましたが、掘立柱建物1棟を確認するなどの成果がありました(図3)。

調査区の東側で、建物1を確認しました(図3・4)。概ね東西方向に並ぶ柱穴3基と、東端で約90度南に振った位置で柱穴1基を確認しており、4基以上の柱穴からなります。建物は北に向かって西に約10度振っており、東西2間以上、南北1間以上の規模に復元できます。それぞれの柱穴は径約0.3mで、柱間は約1.3mの等間隔に並びます。残念ながら出土遺物がなく、この建物の時期は不明ですが、近隣で奈良時代の掘立柱建物が確認されていることもあり、同時期のものの可能性があります。また、他にも複数の柱穴の痕跡を確認しており、建物が複数回建て替えられた可能性があります。

調査地の西側では、大木が風で倒れた痕跡(風倒木痕)を確認しました(図5)。その検出状況から推測すると、木は南側に向かって倒れたようです。風倒木は、人が活動した痕跡である「遺構」ではありませんが、ここに大木が生えていたという動かぬ証拠であり、周辺古環境を復元する重要な手がかりになります。

今回の調査で検出した掘立柱建物の存在は、人々が居住・活動していた証拠となります。中臣遺跡の発掘調査は、道路拡幅工事や区画整理事業に伴うような広範囲を対象とした大規模な調査もありますが、多くは今回のような小規模な調査です。ただ、このような「点」の調査の積み重ねにより、中臣遺跡の様相は「面」として理解されつつあります。今後の調査の進展に期待されます。

(佐藤 拓)



図1 中臣遺跡 (1/15,000)

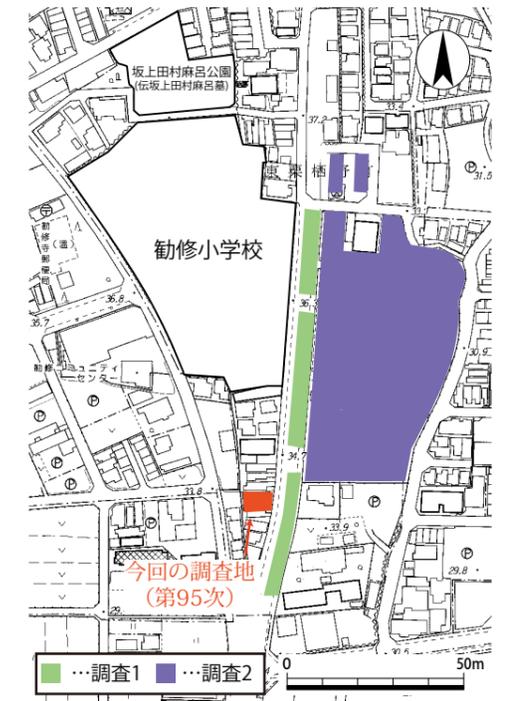


図2 今回の調査地と周辺調査状況 (1/2,000)

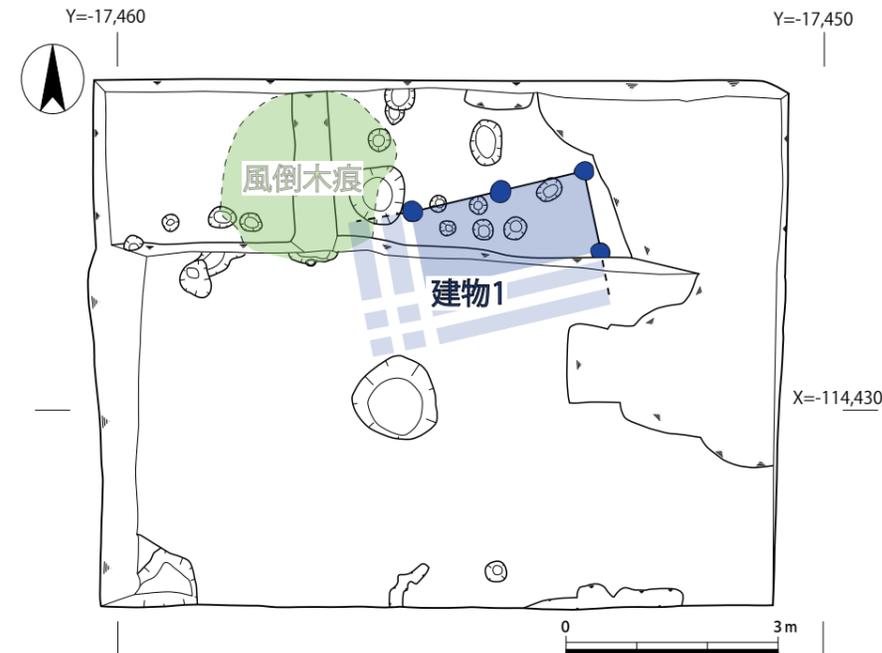


図3 調査区平面図 (1/100)



図4 建物1検出状況(北から)



図5 風倒木痕検出状況(北西から)

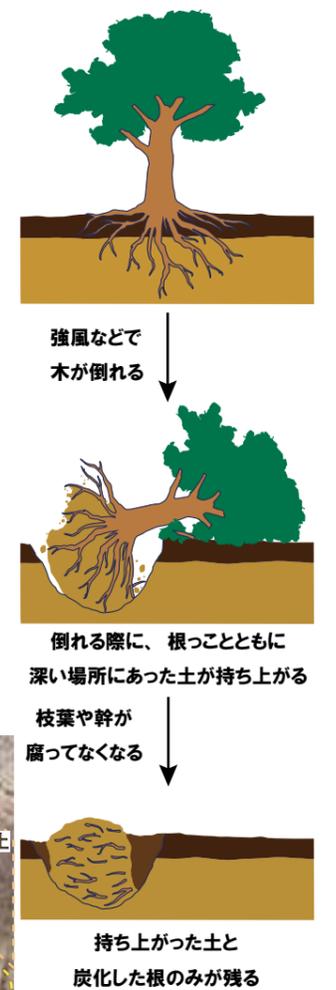


図6 風倒木痕模式図